

アンドレ・ジッド, ピエール・ルイス, ポール・
ヴァレリー(松田浩則・山田広昭・塚本昌則・森本淳
生訳)『三声書簡1888-1890』, 水声社, 2016年

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/1854465>

出版情報 : cahier. 20, pp.13-15, 2017-09-01. 日本フランス語フランス文学会
バージョン :
権利関係 :



日本フランス語フランス文学会

cahier

20

septembre 2017

Ⅱ 書評

アンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ポール・ヴァレリー（松田浩則・山田広昭・塚本昌則・森本淳生訳）『三声書簡 1888-1890』、水声社、2016 年

評者：吉井亮雄（九州大学）

「作者」から切り離された「テキスト」の自律性がいかほど声高に唱えられようと、作家の個人的な書き物はこれら両者がけっして無縁の関係ではありぬことを雄弁に証言している。そのような認識のもと、1990 年代以降、堰を切ったように作家の日記や自伝・回想録、書簡集の出版が盛んになった。とりわけ書簡集にかんしては、ただ作家側の手紙だけではなく、文通相手のそれを合わせた往復書簡集の作成により、一通一通がもつ多面的・対話的な意味合いを探ろうというのが今日の主流となっている。書評対象本は、文通者がいずれも書くことを生業とする者であり、しかも三者間のやりとりである点で、まさにその好個の例と呼んでさしつかえない。

邦訳が底本とするのは、『新フランス評論』関係の書簡集の編纂・校訂で定評のあったピーター・フォーセットとパスカル・メルシエ（ともに故人）が 2004 年にガリマール社から公刊した『三声による書簡集 1888-1920』。計 1,285 通にのぼるジッド、ルイス、ヴァレリー三者間の書簡に、補遺として関連の未刊書簡や資料を添えた 1,700 頁近い大著である。

原著は手紙の書き手に応じて三つに大別される。第一は 1888 年 5 月から 90 年 5 月までで、やりとりはジッドとルイスの二声のみ（「君／僕」の親密な呼びかけ）。第二は 90 年 6 月のヴァレリー登場から、95 年 6 月のジッド、ルイスの絶縁まで。ここでは二人の友人に対するルイスの呼びかけの使い分けが対照的である（ジッドとは「君／僕」、ヴァレリーとは「あなた／私」）。最後の 95 年 7 月から 1920 年 10 月までは、ルイスとヴァレリーの二声となり、互いの呼びかけはやがて「君／僕」へと変化する。

さて本邦訳は、表題が謳うように、最初期 2 年半ほどの 189 通を訳出したもので（記述量としては全体のおよそ 4 分の 1）、巻頭にはメルシエの透徹した原著序文を掲げており、これによって読者は書簡集全体の流れや特質も十分に把握・了解できる。部分訳とはいっても、本書自体がすでに 700 頁の大冊であり、読み応えのほどは申し分ない。また訳者がコーパスとしてこの時期を選定したのは妥当かつ賢明な判断であった。やがてフランス文学における重要な書き手へと成長してゆく三者の知的友情の開始と、彼らの文学的出立の経緯とを

つぶさに物語る書簡群だからである。

若きナルシスたちは「書くこと」で自己の探求を目指していた。ジッドは従姉マドレーヌとのもどかしい恋愛のなかで『アンドレ・ワルテルの手記』の執筆に苦吟している。ルイスは処女詩集の完成にむけて理論・実作両面での努力を続けている。そしてモンペリエで新たな文学に飢えていたヴァレリーは彼ら二人と知り合い、首都の文芸思潮とかかわりを持ち始める。そういった個々の事情を背景に文通は始まるが、特筆に値するのは、これまでごく一部しか知られていなかったルイスの送受信すべてを活字化したことであろう。とりわけ最初期に限定した邦訳では、彼とジッドとの波乱に満ちた友情の最盛期、ヴァレリーの登場による友愛と嫉妬のドラマ、すなわちルイスを軸とする最も初々しく、最も熱を帯びた「三声」の有り様がなおのこと鮮明に浮かび上がる。

彼らの精神的風土を直截に言い表すタームは「芸術至上主義」である。「芸術は芸術自身以外の目的を持つてはいけない」とジッドがルイスに語れば、ルイスは「私たちは全生涯をかけて〈芸術のための芸術〉を守るために戦っている」とヴァレリーに述べる。ヴァレリーも「〈美〉の礼賛とそれ以外のものに対する軽蔑」を語ってルイスの信条に共感を示す。世紀末は既成の宗教に代わり「芸術という宗教」が隆盛した時代であったが、彼らもまた芸術に新たな信仰の拠りどころを求めたのである。一見すると奇妙に思えるが、ジッドとルイスが先を争うようにグランド＝シャルトルーズ修道院への隠遁を願うのも、あくまで芸術上の禁欲と法悦とを求め味わわんがためであった。

三者の手紙は、ユゴー、フローベール、ゴーティエ、ボードレール、マラルメをはじめ、多くの先行作家・詩人の名を挙げ、時にその作品の一節を引きながら、互いの文学観を照らし合う場として機能する。言及された作家や作品の広がりには、三段組の巻末索引が30頁に及ぶことから容易に窺えよう。

さらに手紙は文通者が自作を初めて他者に開陳し、それに対し相手方が各人各様の評価・批判を表明する場ともなる。ジッドとルイスは互いの作品を褒めることもあるが、おおむね意見は噛み合わず議論は平行線をたどる。とはいえ得がたきライバル同士として創作意欲を刺激しあう間柄ではあった。両者とも構想中の作品について語るよう請うているのがその顕れである。いっぽうルイスとヴァレリーの関係はともに和するものであり、韻文に傾倒し「形式」を賛美する点でも共感しあう場合が多い。

最後に贅言ながら——。ジッドとヴァレリーの往復書簡集は、その増補改訂版が別途準備されていたため、版元の意向により原著には収められなかった(5年後に公刊された同版や二宮正之氏による旧版邦訳の併読が望まれる所以である)。1890年末までに時期を絞った本邦訳もこの方針に倣っているが、厳密な意味での「三声」の開始を告げる同年12月後半の5通については、事情が許すならば編入・採録という選択もあったのではないだろうか。

とまれ本書は、瑞々しい訳文、原注を補う適切な訳注、正確な固有名表記が

見事に相俟ってフランス文学、さらには近代文学全般を考えるうえでの第一級の資料となった。訳者の功を称え、同書の出版を心より慶賀したい。